

# 世の中の固定概念に亀裂を走らせたい

河内音頭のノリで歌や紙芝居を演じる  
ディープポップ・パフォーマー

## 高尾 ターケン 憲二 さん



今年8月の最終週末に開かれた山水人の祭りに例によって出かけた。林の中で子ども達を集めてやったターケンの紙芝居を見たあと、片付けてるところを話しかけたらおもしろい話になってきたので、急遽インタビューさせてもらうことになった。彼の紙芝居は山水人で何度か見たことが有り、毎回その意外性に驚かされ楽しませてもらっていたが、じっくり話をしたのは初めてだった。またその前日には一人で歌うのを聞かせてもらった。これまで紙芝居ばかり見ていたので、紙芝居をやる人だと思っていたが、もともとはLIVE演奏で山水人に出演していたそうだ。その歌うスタイルにもびっくりさせられたが、話を聞いていると、紙芝居や歌がなぜ常識的ではないのか、だんだん見えてきて、そんなターケンの生き方をまねしてみるのも面白そうと思えてきた。

(あ)

— 山水人に来るのは何年目ですか？

タ● 僕は歌うほうからやっていて、もう最初のころから来てます。

— 僕は歌は昨日初めてきいたんですが、昔からああいうかんじでやってたんですね。

● 昔はああいう感じじゃなかったんです。あれはここ5年くらいで、それまではもっとロックみたいなかんじで熱く歌ってたんです。どんどんやっていくうちに、自分の音楽を追求して行って、自分節みたいなのを求めたいから。いろんなジャンルとか見たりやったりしたけど、けっきょく響いたんが地元の河内音頭やったんです。地元は北河内で、河内音頭と江州音頭があるんですけど、その両方ともにしびれてしもうて。滋賀の江州音頭とはちがってテンポがめっちゃ速いんです。台詞=歌詞はいっしょで、同じ江州音頭やけど。もともとは滋賀やったのが、そこから枝分かれして、大阪は飛んで河内に根付いてし

まって。浅草に河内音頭があるらしいんですけど、それもそんなかんじみたいで、飛び火するのがあるみたい。自分節をもとめて20年くらい旅したかんじで、やっと自分の歌をうたえるようになったんです。

— 河内にはいつ頃迄住んでたんですか？

● 20才くらいまでです。それから京都に来て。で、音楽はもうはまったらいくらでも即興で出ます。

— あんなふうにはペラペラ歌ったり話す人を見ると、よっぽど記憶力がいいのかなーと感心しますけど。

● 昔の芸人みたいなかんじが好きなんです。かっこいいなーと。笑かしてるけどうまいみたい。で、興味を持って、そういう風にやっていこうと思ったんです。それが最近やっと形になってきた。最初のころはやっぱりぜんぜんしゃべられへんかったし。即興

もできひんかった。

— 紙芝居をやり始めたのはいつ頃から？

● それも5年くらい前で、またそれもめっちゃいいエピソードがあるんですよ。なんで僕が紙芝居やっているかという。……村屋って知ってます？

— 京都の飲み屋さん？

● はい。あそこのマスターとすぐ仲がいいから、イベントに出たりしていて、僕は絵も好きで描いてるのをマスターが知ってて、で、いきなりイベントの時に「ターケン紙芝居」って書いてたんです。そんな無茶ぶりやったことないんですよ。それで「え？おれ紙芝居なん？どうということなんすか？」て聞いたら、「できるやる」て軽く言われて、おれも「いや、できるけど」って答えて。まあそういうの面白いなと思って、スリリングやけど、そんなんが好きなかんじやから。でけへんか



## (2) 名前のない新聞 No.208 / 2018年 11・12月号

ったらどうしよーみたいなぎりぎりのところ。で、それから2週間後くらいにイベントやったから、急いで紙芝居の話をつくったんです。その頃は仕事で木版画と額縁屋をやってたから、額縁のいらんやつを横を切り抜いて開けたら箱になりますやん。もうそれ応急で作って、そういうシンプルな箱で。それでやったんですよ。

で、まったくの自己流でやってみたら、けっこう受けたのもあったけど、自分で気持ち良かったんです。それまで歌っててなんか足りひんなーと思ってたら、しゃべりが足りひんかった。MCあんまり長いことしゃべってもなんやし、でも紙芝居は芸としてしゃべってもいいという感じで、意外とはまったんですよ。歌も好きなようにうたってもいいし、筋さえあれば。その場その場でやるライブ性もあるからええわーと思って。楽器も鳴らせるし、で、合うわーと思ってまたやりたいなと思ってたら、その時見た人から、またどこどこであるから出てくれませんかとつながって、またそれ

を見た人から呼ばれて、ずっとずっと、今もそれ。で、けっこうロックフェスで呼ばれることがあって、フジロックに行ったりもして。普通の紙芝居よりもちょっとロックですよ。で、最近のロックフェスはみんなもう子どもがいる客が多くなって、子ども達を置いてくキッズブースというのがあるんですよ。そこの担当の人というか、子どもをまとめる人から呼ばれたりするんで。その枠がけっこう最近はあるから、それでつながったんです。

—— 紙芝居ってもともと子どもが見るイメージがあるけど、もともと子どもが好きとかそういうことはあるんですか？

● そうでもないんですけど。自分にも子どもが二人いて、紙芝居を始めたころは3歳と5歳で、いま10歳と8歳です。で、さいしょは子どもが喜ぶから、自分の子どもに「高いもんとか買ってやられへんけど、こんな特別におもしろいことやってるおとんやで」と見せるために。もうそのやり方ばかりやってるんやけど。ライブの時もステージと一緒にあがってやらしたりとか。山水人でも娘と出たことがあります。

—— じゃあ家族バンドやってたんだね。

● そう、もともとはその一環やったんです。でも最近もう子どもが紙芝居なんかに興味なくなってきて。最初のうちはおもしろいと喜んでくれたし、サクラもしてくれとったのに。



—— そうなんだー。じゃあまた子どもを作らないと。(笑)

● だんだん自分の子どもは飽きてくるけど、ほかの初めて見る子とかに見せるというふうにやっていくようになってきて。イベントとかでも子どもらが出て欲しいと、僕の紙芝居を見たいと言うから出れるということもあって、橋の下音楽祭なんかもそうなんやけど、パーソナルエナジーというソーラーパネルとか全部やってはる人の娘が僕の紙芝居が好きで、娘がどうしても出て欲しいっていつも言うから、僕出れるねん、いつでも。(笑) 子どもらが言うから。

紙芝居っていう媒体ってあんまり毒がないやん。なんかいいものっぽいやん。もう無条件に子どもぜったい見たらいいやんみたいなかんじがあるでしょ。

—— 紙芝居なんて今の時代、すごく古い昔のものというイメージがあるけど、意外と子ども達はみんな好きだね。

● 準備して枠を置いてるだけで子ども達が集まってくるね〜。

—— でも僕も普通の紙芝居は特に興味ないけど、ターケンの紙芝居は大人が見ても面白いと思うし、普通のとは全然ちがうもんね。昔話みたいな普通の紙芝居はやることはないでしょ？

● そうですね。それは僕じゃなくてもいいやんて思うから。意味がないというか。

たまに無条件に、紙芝居やってるんやったらうちの幼稚園にも来てー！みたいと言われることがあるんやけど、絶対「見た事ありますか？」って確認するんです。普通の紙芝居と思われたときに、やった後に「え？」てかんじになられたことが何回もあるねん。(笑) 呼んだくせに一みたいな。それ怖いから、聞くようにしてる。それで見た事あるんか、それでいいんかと念を押して、ほんでいいと言ったとこにしか行ってへんもん。わかってくれてるところにはいいけど。

—— そのターケンの紙芝居の内容だけど、既成概念を壊されるようなかんじがして、そうか！自分だったらこういうこともできる可能性があるって気が付かされるなと感じましたね。

● ちょっとひねくれてるんか知らんけど、ふつうに行くよりもひねりが欲しいなと思って。みんなこう思ってるやろうけど、でもこうとも言えるみたいな。すきまで。裏切りの表現みたいなのが好きかも。

—— 今までどれくらいの紙芝居の話を作ってるんですか？

● 紙芝居は10ヶくらいあるけど、そもそもマンガも描いてるんですよ。マンガは自分で刷ってとめて、1つ¥100で。長編は10何ページあって、短編は5ページくらいしかなくて。ぜんぶA6のサイズで白黒の印刷してて、ホッチキスで留めてある。で、うしろにちゃんとハンコも押してて、「Good Comix」という自分の会社ちゅうか、偽物が出回ったらあかんからと(笑) 赤いハンコ押してあんねん。そういうのはもう15年前くらいに何かしたいなと思ってたからつくって、15ヶくらい話がある。で、その話を紙芝居にしたバージョンもある。3つか4つは。

それもなかなか買われへんようにしてて、いろんなところで出会って、たまたま持ったりして、この人にあげてもいいわーと思った人にあげるみたいにしてて。いちおう¥100やけど、金出したら買えるんじゃないようなかんじにしたかってん。そういう売り方の遊びというのか。でもなかなか人気が出て、沖縄から長野くらいまで、それを持って人に別口で会ったりすることがあんねん。「どうもターケンて言います」て挨拶すると「え、マンガかいてませんか？」と。「なんでですか？」と聞くと、「僕の家にありますよ。誰かが持ってきてた」とか言って。そんなことがあったりするんです。手売りで何百部も売りましたよ。



→ 今年の山水人・林の中で紙芝居をするターケン。いかにも怪しい格好をしている。

今度はそれをあえてアマゾンで売られるように番号をとったかなと思って。そんな手作りの状態のやつを。(笑)あのISDなんか番号で1万なんぼかでとれるんですよ。そしたらアマゾンで売れるねん。こんなマンガを売ってたら面白いやん。そのこと自体が。こんなホチキスで綴じたやつでもええんや！て。

— それは、考えてみれば、形はどうでもいいよね～。

● そう、本やから。大事なのはそのストーリーやし、紙のよさじゃないやん。なんかそういう世の中の固定概念を感じるから、そこに亀裂を走らせよう。そんなん出してるやつがおったら、それでええんや、そりゃあそやなと気づく人が出てくる。編集者に持って行かんと本なんて出されへんと思ってたのが、自分で出せばいいと。大事なのは中身やねんから、編集者が別にあかんで言っても、別に自分で刷って出せば、それは同じことやんか、ということになるやん。

— 今まで本を出したいと思ったら出版社の段階でまず編集者のOKが出ないといけなかったし、そのあと東販とか日販という流通のOKもとる必要があって、何重もの規制があったもんだけど。

● 編集者の基準があって、あんまり過激なことは書いたらあかんとかあるやん。ラインがあって、そこに合格せなあかんと。でもそんなんは、自分で書いて自分で刷って自分で出したら関係ないやん。

— それを見たら、それじゃあ自分もやってみようかと思う人が出てくるかもね。

● そうそう。真似されたらええってことから。

— アマゾンも出版流通の規制のシステムを壊したと思うし、インターネットというのも誰でも情報を発信できるし自分で探せるっていうふうにもメディア独占が崩れてきてるもんね。ただそうなってきていても、こういうのはダメだろうなとか自分の頭の中で規制かけてしまってる人も多いかもしれ



れないね。

● それ、なりやすいですね。でもたとえば朝、家でた瞬間に知らん人とすれちがったときに、声かけてくるぐらいのかんじがおもしろい。「どこ行くん？」て。ほんなら今日何が起るんやろ、絶対なんか起るやろって想いながら毎日迎えるやん。今日誰に会うんやろって。でもそれやろうと思ったらできるやん。ただ恥ずかしいからせえへんだけやん。かっこわるいとか。

— 特に都会だとねー。田舎だとまだ違うかもしれないし、こういうお祭りの会場にいたら、知らない人でも挨拶したくなる空気はあるよね。

● あるね。それが日常でなったら、もっと人生が変わるかも。そういうのを求めてもいいっていうか、求めたらあかんやろっていうのはない。全然求めたらええやんて思うし、それをやりたい。

— マンガとかは子どものころからかいてたりするんですか？

● かいてました。マンガも紙芝居みたいなもんやけど、始めた頃よりも、年年やりたいことが定まってきていて。昔はむやみやたらに変な話をかいてたけど、今はちゃんと落ちが自分の感じで出せてるといって、自然に風刺したかんじになってしまうねん。落ちも絶対ないとあかんという前提でやってるわけじゃないし、ぜんぶがインスタレーションみたいな感じやねん、全部がなりきって、子どもも巻き込んでそういう場をつくってるっていうか。で、子どもは子どもなりに面白いけど、大人が見ても面白いという、最近はまだんそういうふうになってきてるねん。

だから僕はディーブポップというジャンルを作ってるんですよ。

— え？ディーブポップ？

● 自分のジャンルがあるんすよ。ディーブポップというマークもあって、ブランド作ってるんですよ。バッジとかもあって。音楽のジャンルも紙芝居のジャンルもぜんぶディーブポップなんです。どんなん

や？と聞かれたらディーブポップやと。もう説明でけへんから、自分で作ったれと思っ。だからきのうやった音楽もディーブポップやし、個展やっても、僕がやるやつやったら全部ディーブポップっていうことやねん。

まあ単純にディーブでポップなんやけど。それはもう10何年前からずっと言ってる、多分みんな自分のそれがあるねん。僕はディーブポップという名前をつけたいけど、他の人達は違うもんがあって、自分の真理みたいなもの名前。宗教やったらハレルヤとかいえるんなんがあるやん。あんなんみたいなもんで、自分が出すもんは絶対それにつながるっていうか。どんなふうにしてもそれになっていくように。

で、ディーブだけやったらもったいないという場面をよく見てきたんですよ。分かる人にはわかるやろけど、こういう話しは一瞬難しいように感じても、ほんまはポップちゅうかポピュラーなところの人も、実はそこを知りたがってるのに、ディーブから言うて聞いてくれへん。「むつかしそう～」って。ほんまは求めてることなんやけど。そういう構図を見たり感じたりして、もったいないなと思ってる。で、ポップさはやっぱり大事ななと思っ、難しくないと怖くないと思わないと、とりあえず聞こうかってならへんやんか。それがない段階でガーって言ったって、入っていかへんから。すごいもん出してても。せっかく出しても響かへん。そんなん響かんでもいいわーと思っやってる人もいるやろけど、僕やったら効果的にいきたいなと思っから、ポップさを大事にせなあかんと思っ。でもまたポップさだけやったら薄っぺらくなるし、ちゃんと深いちゅうか、自分の求めるものをつきつめるいうか、触れてる方が気持ちいいから。それでディーブポップやねん。

間口広くして、だんだん知らん間に深なっ



てるっていう、そういう装置みたいなふうにしたいなと。

王道的な普遍的なものっていうのは、ど真ん中にどすんとあるってものは、僕からしたらディープポップやねん。わかりやすいし、でも深いし。

で、自分でジャンルつくるってこともおかしいやん(笑)。でも別に作ってもいいやんみたいな。ジャンルなんてもともとはぜんぶ誰かが作ったんやから。みんなそうやんか。そこに出すもんがあるんやったら。

——今はじゃあ歌とマンガと紙芝居という表現手段があるんだね。ほかには何かある？

● 本も書いてます、文章を。カラダ系、健康系。自分流の健康法で、たとえば息を吐くときに力を抜くという鉄則があって、『口の穴からケツの穴まで』という題の本。口の穴は一つやん。で、ケツの穴も一つで、入るところと出るところや。鼻とか目とか耳とかは二つあるやん。で、口とケツをつないだ一本の線を基準線として、目は右と左、耳も右と左ってあるから、右の方が重たかったら左にもってきてバランスをとる。それをぜんぶやっていく。どうやってバランスとっていくかというと、自分で押したりもんだりっていう力を使ったらあかんっていう鉄則があるから、つま

り力は抜いてないとあかんから、唯一使える重力を使う。とにかく力は抜いて抜いて抜いて、どんどん深いところまで抜いていくねん。そしたら中のほんまの芯が出てきて、ほっといてもちゃんと立つとかまっすぐなるねん。それは声も関係してきて、そこが通ってへんかったら声が響かへん。マントラとかはカラダが筒状になって通ってるからそこを響かせてるし、八百屋のらっしゃいらっしゃいという呼び声も、浪曲の声も、みんな同じやねん。力が抜けてるねん。

——そういうことはいつごろから考えた？ なにかぎっかけが？

(あしがき)

・このあとに続き話しも大変面白かったが、スペースがないのと、かなり微妙な話しくなってくるので、表に出せるのはこのへんまで。この本はまだ執筆中でいつ出来るかはわからないとのことでした。

